

1980年12月9日、パリから高速列車(TGV)で南仏マルセイユへやって来た。駅構外へ一歩足を踏み出した途端、号外を配っている若者の周囲を大勢の人が取り囲み、大声を張り上げて騒いでいる異様な光景を見て、一体何ごとが起きたのだろうかと思しく思った。

実は、その前日ニューヨークでかのビートルズのジョン・レノンが、何者かによって射殺されたのだ。しばらくの間マルセイユでもジョン殺害の話題で持ち切りだった。

そのマルセイユは、パリ、リヨンに次ぐフランス第3の都市で、地中海に臨むプロヴァンス地方のフランス最古の港湾都市である。市内のどこからも眺められる丘の上のノートルダム寺院、港の目の前の『モンテ・クリスト伯』(巖窟王)の舞台となったイフ島と、フランス料理の絶品、舌も喉もとろける海鮮料理ブイヤベースは、マルセイユっ子にとって格好の自慢の種である。

ところが、意外や意外、彼ら土地っ子から、この「マルセイユ」に因んで名付けられた日本製の商品があると思わせぶりに聞かされ、一体それは何だろうかと思味が沸いた。

実のところマルセイユは石鹼の産地として、300年余の歴史を誇る天然のオリーブ石鹼「サボン・ドゥ・マルセイユ」(SAVON de MARSEILLE)が、地味ながらも特産品として昔から世界的に知られている。日本にもその特産地の名を冠した石鹼があると話されたのだった。

マルセイユは、英語では「マー(ル)セイル」と発音し、それを石鹼会社は日本式に簡略化して「マルセル」と読み、「サボン」を「シャボン」と訳して、日本の石鹼会社が「マルセル石鹼(シャボン)」として生産し販売していたのだ。今も「〇〇マルセル(株)」(横文字で〇〇 MARUSERU CO.,LTD.)会社が、細々と「マルセル石鹼」を製造・販売している。しかし、マルセイユが日本流マルセルに変わったため、社名にも石鹼自体にも原産地フランス・マルセイユ(MARSEILLE)との関係が伝えられず、「マルセイユ」との縁も所縁も感じられない。

戦中から戦後にかけて日本市場に出回っていた「マルセル石鹼」も、今では大手石鹼メーカーの後塵を拝している。マルセイユで日本の「マルセイユ石鹼」を誇らしげに語ってくれた土地っ子が、変貌した「マルセル石鹼」の実態と真相を知ったら、さぞかしがっかりすることだろう。

エッセイスト 近藤 節夫